

お盆を過ぎたとは言え、日中の気温はまだ真夏の勢いを失っていなかった。

越後関川村の下関に渡辺李郷宅を訪れて二日が過ぎた昼下がり、離れの縁側に腰を下ろして竹林を渡る風の音に耳を傾けていたミチは、母屋の方が急にざわついた気配に変わったのに気付いた。

近在で豪農、豪商と言われる渡辺家だけに、大勢の人の出入りで絶えず賑わっているが、どうもいつもの様子とはどこか違っている。

縁側を離れ母屋の方を竹林越に窺うと、店の前に豪華な籠がとまっているのが目に入った。

周りには数人の武士が立膝で控えている。何事が起きたのかひどく気になるが、近づいて確かめるのははばかられ、ミチはそのままそこに立って成り行きを見守った。

だが、暫く待っても何の動きもないようなので、ミチは諦めて再び縁側に引き返し、矢立と雁皮を引き寄せた。渡辺邸での昨夜の句会の句を清書するつもりだった。

暫くすると再び母屋のほうざわついて来た。ミチは手にした雁皮と矢立を置くと、先ほどと同じ場所から竹林を透かして母屋を眺めた。

すると一人の立派な身なりの武家と思われる人影が、渡辺

李郷ら数人の店の者に見送られ今まさに籠に乗るところだった。

一体何事かあったのだろうか？

離れで李郷の妻、トシと二人で夕食を済ませ、世間話に興じながらお茶を頂いているところへ、長門の国からの珍しい客を交えて今夜も句会を開くのだ、と李郷がうきうきとした顔で入って来た。

その顔を見てミチは、昼間見た出来事を尋ねてみたくなつた。

李郷は

「ああ、あの方は米沢藩藩主の上杉治憲様(後の鷹山)です」と言った。

するとその話を引き取るようにトシが

「藩に用立てたお金を自らお返しに見えたのですよ。ほんの一部ですけどね」と言いながら愉快気に笑った。

李郷は

「滅多なことを言うものではありませんよ」と妻を制したが、トシは

「いいではありませんか。米沢藩が貧乏で借金だらけのことを知らない者はいないので。世間では、金を抜くのに苦労は要らぬ上杉と書いた紙を貼ればいい、と言われてるほどなのですよ」そう言ってトシはカラカラと笑った。

そして、李郷の言葉を無視して更に話を続けた。

関ヶ原の戦い後、会津百二十万石から米沢十五万石に削封された上杉だが、会津時代の家臣を一人も辞めさせなかった。その為人件費が藩財政を極端に圧迫しているという噂をミチも聞いていた。

そればかりか、寺社や職人達も上杉を慕って競うように米沢に移住して来たからたまらない。小さな城下町は人でごった返し、粗末な家に二所帯、三所帯が同居してもまだ家が足りない状態だった。

逼迫した財政は借金の上に借金を重ね、泥沼のような藩政は破綻寸前まで追い込まれていた。

藩領を幕府に返上しようという動きまで出て来たのも、むべなるかな、米沢藩はもはや死に体以外の何物でもなかった。その借金の相手先が豪商渡辺家だったのだ。

渡辺家としても十数万両(現在の金額換算百数十億円)の貸付をむざむざ放棄する訳にはいかない。何度となく返済のお願いをしてみたが、何十年もの間全く糠に釘だった。

ところが、治憲の代になって様子が変わった。江戸での藩主の生活費千五百両を二百両に、奥女中五十人を僅か九人まで減ってしまった。

それだけではない、自ら粥をすすする徹底した緊縮令を課し、改革に異を唱える重臣達を強固な意志で排除したのだ。

そしてその結果、米沢藩としては今回初めて、僅かではあ

るが渡辺家へ借金の返済に訪れた、ということだった。

それも藩主自ら、返済と永い間の無策を詫びに赴いたのだった。

「江戸で学問を教わった先生細井平洲さんを米沢に招いた時は、城から二里近い道のりをわざわざ歩いてお迎えに行つたという殿様だからこそ、こうして私どもの所へも、わざわざご自身でおいでになったのでしょね。」そう言つてトシは、米沢藩主治憲の人柄を讃えた。

ミチは「奥の部屋に皆さんお揃いですよ」と言う李郷の言葉が耳に入らないほど、トシの話しに聞き入った。

上杉治憲の人柄に触れ、胸の中がほっこりと温かくなる穏やかな初秋の夕暮だった。